

■研究調査レビュー

奄美の黒糖焼酎産業について(3)

山本 一哉 (鹿児島大学法文学部)

目次

1. はじめに
2. 奄美経済と基幹産業
 - (1) 奄美経済の成長と経済格差
 - (2) 奄美の産業構造と基幹産業
3. 黒糖焼酎産業の成長と地域経済効果
 - (1) 雇用・所得・税収効果
 - (2) 産業連関効果
4. 移入超過と“外貨”獲得産業
 - (1) 奄美経済と移入超過
 - (2) 黒糖焼酎産業と“外貨”獲得
5. おわりに

1. はじめに

本誌4月号、5月号では、奄美の黒糖焼酎産業について、酒税法上の規定、生産・出荷動向、原料糖の問題など、について報告した¹⁾。

奄美では、大島紬産業やサトウキビ作りが低迷し、また「奄振」による公共事業が先細りする中で、急成長を続ける黒糖焼酎産業に基幹産業としての期待が集まっている。本稿では、大島紬産業との比較を交えながら、奄美経済全体から見た黒糖焼酎産業について報告したい。

2. 奄美経済と黒糖焼酎産業

(1) 奄美経済の成長と経済格差

図1は、奄美の(名目)郡内総生産額と本土との所得格差の動きを示したものである。まず、郡内総生産を見ると、90年代前半緩や

かに増加し、90年代後半以降は3,400億円前後で停滞している。2002(平成14)年度の郡内総生産は3,386億円で、前年度比マイナス0.7%だったが、県内総生産の伸び率(マイナス1.3%)を0.6ポイント上回った。この背景には、製造業が8.7%と大きく成長したことがある。製造業では、大島紬の生産は減少したものの、砂糖や黒糖焼酎など食料品(15.2%増)や窯業・土石製品(10.7%増)の生産が大幅に拡大した。

次に、奄美と本土との所得格差を見ると、90年代、格差は緩やかに縮小したことがわかる(図1)。しかし、依然として格差は大きく、県民所得とは約1割、国民所得とは約3割もの格差がある。多くの物資を群島外に依存し、輸送に高いコストがかかる奄美では、物価が本土と比べて約1割程度高い。よって、実質所得で見ると、奄美と本土の所得格差はさらに大きいことになる。

(2) 奄美の産業構造と基幹産業

表1は、大島郡内総生産の業種別構成比を示したものである。2002(平成14)年度の産業構成を鹿児島県及び国と比較すると、①農業のシェアが大きいこと、②第2次産業のシェア、特に製造業のシェアが小さいこと、③建設業のシェアが大きいこと、④政府サービス生産者のシェアが大きいことなどを特徴として挙げることができる。

また、1975(昭和50)年度と2002(平成14)年度の構成比を比較すると(SNA基準が異なる点に注意)、①第1次産業と第2次産業のシェアが大きく低下し、代わりに第3次産業が大きくシェアを伸ばしていること、②

¹⁾ 山本一哉「奄美の黒糖焼酎産業について(1)」鹿児島大学『奄美ニューズレター』No.17(2005年4月号)、12-21頁及び「奄美の黒糖焼酎産業について(2)」鹿児島大学『奄美ニューズレター』No.18(2005年5月号)、40-48頁。

農業のシェアが5.7ポイント低下していること、③製造業のシェアが12.3ポイントも低下していること、④サービス業が11.2ポイントもシェアを拡大させていることがわかる。農業のシェアが低下した背景には、言うまでもなく、サトウキビ生産の減少がある。また、製造業のシェアが大きく低下したのは、奄美の基幹産業である大島紬産業と製糖業の衰退による。

表2は、奄美の主要産物の生産動向（生産額の推移）を示したものであるが、1980（昭和55）年度からわずか20年余りの間に、大きな変化があったことがわかる。大島紬、砂糖、サトウキビ、という3大産物が衰退し、代わって、野菜・花き、肉用牛、そして黒糖焼酎が著しい成長を遂げた。サトウキビは依然として基幹産業トップの座を守っているが、1990（平成2）年以降、生産量が激減しており、2004-05年期の生産量は3年連続で40万トンを超えることが濃厚である²⁾。サトウキビ生産量の減少は、製糖業（大型分蜜糖工場の経営）だけでなく、奄美経済全体にも深刻な影響を与えている³⁾。

また、和装離れや景気の低迷による大島紬生産量の減少は著しく、奄美経済に与えるマイナス効果も大きい⁴⁾。奄美産大島紬の生産量は、ピークの1972（昭和47）年、297,638反を記録したが、その後緩やかに減少し、85（昭和60）年以降、急激に減少した（図2）。

2004（平成16）年の生産量は30,235反であり、これは72（昭和47）年の生産量のわずか約10分の1に過ぎない。生産量の減少に伴って生産額も大きく落ち込んでいる。2004（平成16）年の生産額は約24億円で、過去最高を記録した1980（昭和55）年の10分の1以下まで減少した。大島紬産業の衰退は奄美の雇用にも大きな影響を与えている。1980（昭和55）年の大島紬従事者数は17,134人で、奄美全体の従業者数（72,334人）の23.7%が大島紬関連の仕事に就いていた⁵⁾。大島紬従事者数は、1985（昭和60）年時点でも15,327人あったが、2000（平成12）年には3分の1の5,103人（就業者全体の9.0%）まで減少した⁶⁾。

図3は、大島紬の生産額と黒糖焼酎の出荷額を比較したものである。大島紬産業の衰退と対照的に、黒糖焼酎産業は急成長し、出荷額を大幅に伸ばしている。大島紬の生産額が、1980（昭和55）年から2003（平成15）年の間に、10分の1以下まで減少したのに対して、黒糖焼酎の出荷額は約5倍の約100億円まで増加した。黒糖焼酎産業は、90年代に入り、異業種からの新規参入や県外出荷の拡大により徐々に成長を始め、1998（平成10）年には初めて黒糖焼酎の出荷額が大島紬の生産額を逆転した。そして、その後の焼酎ブームの到来により、両者の差は一気に拡大した。2003（平成15）年の数字で比較すると、黒糖焼酎の出荷額は大島紬の生産額の約4倍である。データの出所が異なるため厳密な分析ではないが、奄美全体の製造品出荷額等（「工業統計」⁷⁾との比率で見ると、製造業における両産業の大きさの違いがより鮮明になる。2003（平成15）年の奄美全体の製造品出荷額

²⁾ 『南海日日新聞』（2005年1月8日）。台風と干ばつの影響で、2004-05年期の生産量は史上2番目に少ない36万637トンになる見通し。

³⁾ サトウキビ生産が鹿児島県経済に及ぼす波及効果は3.97倍（例えば、サトウキビ生産額が1億円減少すると、県全体で3.97億円の所得が減少する）という推計結果もある（叶芳和「さとうきび産業の発展方向と地域経済（その1）-鹿児島県種子島・喜界島・奄美大島-」独立行政法人農畜産業振興機構『今月の視点』2002年3月（http://sugar.lin.go.jp/japan/view/jv_0203a.htm））。

⁴⁾ 大島紬産業の現状については、叶芳和「大島紬進化論」独立行政法人農畜産業振興機構シルク情報ページ『今月の話題』2002年12月（<http://sugar.lin.go.jp/silk/info/wadai/0212wa1.htm>）、上野和彦・立川和平「大島紬織物産地の構造とその二重性」東京学芸大学『東京学芸大学紀要第3部門社会科学』第54集、2003年1月、49-61頁を参照のこと。

⁵⁾ 大島紬従事者数は、本場大島紬協同組合調べ。

⁶⁾ 組合の調べでは、2002（平成14）年9月末現在（織のみ2003年3月末現在）の紬従事者数は4,594人。

⁷⁾ 鹿児島県企画部統計課『鹿児島県の工業（平成15年工業統計調査結果）』（2005年1月）。なお、「製造品出荷額等」とは、製造品出荷額、加工賃収入額、修理工賃収入額及びその他の収入額の合計であり、内国消費税額を含む。

等は337億円で、黒糖焼酎の出荷額はその約3割に相当する⁸⁾。これに対して、大島紬の生産額は7.6%に過ぎない⁹⁾。

確かに、最近の動向だけを見ると、奄美経済における基幹産業の主役交代を思わせるが、2003(平成15)年度の黒糖焼酎出荷額は1980(昭和55)年の大島紬生産額の3分の1に過ぎない。

3. 黒糖焼酎産業の成長と経済効果

(1) 雇用・所得・税収効果

黒糖焼酎産業の成長は、奄美における雇用・所得・自治体の税収の増大に貢献している。焼酎ブームによる製成量の拡大に伴って、多くの酒造所が製造・貯蔵設備を増強するとともに、新規雇用を増やしている¹⁰⁾。雇用の増大は、単に従業者の所得を増大させるだけでなく、乗数効果を通じて奄美全体の所得を拡大させる効果もある。ただ、多くの物資を群島外へ依存している奄美経済では、需要の漏れが大きく、乗数効果は小さいものと推測される。

また、大島紬産業が労働集約的なのに対して、黒糖焼酎産業は装置産業であり、生産額の割に雇用創出効果はそれほど大きくない¹¹⁾。奄美には従業者数が40人前後の大規模酒造所も3つほどあるが、ほとんどが10人以下の零細な酒造所であり、業界全体で見ても就業者数は250人前後¹²⁾と推計される。これに対して、大島紬の従業者数は大幅に減少したとは言え、現在でも4千人を超えている。先に見たように、1980(昭和55)年には約1万7千人もの雇用を提供していた。雇用形態や賃

金体系が異なるため、単純な比較はできないが、両産業の雇用創出効果には大きな開きがある。

(2) 産業連関効果

かつて奄美に存在した「サトウキビ栽培－砂糖(黒糖)造り－黒糖焼酎造り」、という産業連関は今ではほとんど消滅してしまった(図4)。その主因は、1960年代前半、政府が打ち出した糖業政策(製糖工場の分蜜糖工場への転換)にある¹³⁾。

現在でもサトウキビ栽培は盛んだが、収穫されたサトウキビのほとんどが島内の大型製糖工場に分蜜糖の原料として持ち込まれている。そして、生産された分蜜糖は、島内で消費されることなく、精製糖の原料として県外の製糖工場へ出荷されている。よって、サトウキビの生産量が増えたとしても、黒糖焼酎の生産に与える影響は小さい(前方連関効果は小さい)。一方、黒糖焼酎メーカーは、原料糖のほとんどを沖縄県や海外から調達し、製成した黒糖焼酎の約6割を県外市場に出荷している¹⁴⁾。今でも黒糖を生産する小型製糖場は残っているが、焼酎用に生産される黒糖はわずかである。このため、黒糖焼酎の製成量が増えたとしても、沖縄県や海外からの原料糖の仕入が増えることはあっても、島内のサトウキビ栽培や製糖産業(特に大型製糖工場)にはほとんど影響しない(後方連関効果はほとんどない)。このように、産業連関が消滅した現在、黒糖焼酎の生産拡大によるサトウキビや砂糖生産へのプラス効果は限定されたものにならざるを得ない。

また、焼酎ブームで黒糖焼酎の出荷量は増えているが、地元の商業(焼酎の卸・小売業)へのプラス効果はそれほど大きくない。とい

⁸⁾ 1980(昭和55)年の同比率は4.1%。

⁹⁾ 1980(昭和55)年の同比率は55.9%。

¹⁰⁾ 例えば、奄美大島開運酒造では今年の4月から新たに5名を採用した。また、徳之島の奄美大島にしかわ酒造は、昨年、工場を移転・新築した際に、新規に11名を採用した(『南日本新聞』2004年3月26日)。

¹¹⁾ 『日本経済新聞』(2000年12月10)。

¹²⁾ 『工業統計』東磨子(鹿児島大学法文学部人文学科地理系)『黒糖焼酎産業の構造と変動』(2005年3月)及び聞き取り調査による推計。

¹³⁾ この点については、前掲「奄美の黒糖焼酎産業について(2)」、42頁を参照のこと。

¹⁴⁾ 詳細は、前掲「奄美の黒糖焼酎産業について(1)」及び「奄美の黒糖焼酎産業について(2)」を参照のこと。

うのも、増加分のほとんどが県外出荷分であり、島内出荷はさほど増えていないからである。

こんな中、失われた産業連関を復活させ、地域の活性化に成功している事例がある。本誌5月号でも紹介した宇検村の取り組みである。村は、1996（平成8）年、地域活性化を目的に、「株宇検村元気の出る公社」を設立し、遊休地や耕作放棄地を利用したサトウキビ栽培と黒糖生産の取り組みを開始した¹⁵⁾。「元気の出る公社」は、宇検村、松山産業と開運酒造の関連会社である宇検農産（農業法人）の出資により設立された第三セクターである。村は、1997（平成9）年7月、公社が生産した黒糖を出荷する奄美大島開運酒造の焼酎工場を誘致し、翌98（平成10）年2月には黒糖工場の操業を開始した。こうして、地元農家がサトウキビを栽培し、これを「元気の出る公社」が買い取り、黒糖工場で黒糖を生産し、黒糖焼酎工場に原料糖として売却するというシステム（産業連関）が小さな村の中に完成した（図5）。また、黒糖工場や焼酎工場では多くの地元住民が雇用されており、付加価値の多くが村に落ちる仕組みになっている。

1997（平成9）年度、8.3haで始まったサトウキビ栽培も、2003（平成15）年度には21haまで拡大した。「元気の出る公社」による2003（平成15）年度の黒糖生産量は41t（販売額：約2千万円）で、うち39tが開運酒造に販売された。また、開運酒造は、短期間で年間製成量が1,000キロリットルを超える業界でもトップクラスの焼酎メーカーに成長した。

2004（平成16）年度、サトウキビ契約農家・団体は23あり、「元気の出る公社」の黒

糖工場では最盛期には11人が働いている¹⁶⁾。また、当初10人程度だった開運酒造宇検村工場の従業者数は、現在では約50人まで増加し、うち40人が村民である。産業連関の復活により、人口わずか2,000人程度の村で、少なく計算しても70人以上の雇用が創出されたことになる。

ここ数年、奄美大島開運酒造以外にも地元産黒糖の使用を増やそうという焼酎メーカーが増えている。その中でも、産業連関の復活という点で注目されるのが、奄美大島酒造（龍郷町）の取り組みである。奄美大島酒造は、2005（平成17）年より、分蜜糖工場である系列会社の富国製糖（笠利町）に原料糖の委託生産を開始した¹⁷⁾。今後、この取り組みが奄美大島本島のサトウキビ増産にもつながることを期待したい。

4. 移入超過と“外貨”獲得産業

(1) 奄美経済と移入超過

多くの財貨・サービスを群島外に依存している奄美では、移出入バランスは常に大幅な移入超過状態にある。図6は、奄美群島の群島外との財貨・サービスの金額的な移出入バランス（いわゆる「域際収支」）を示したものである。1990（平成2）年度から90年代半ばにかけて移入超過は大幅に拡大し、ピークの96（平成8）年度には約1,200億円を記録した。その後は安定した状態が続いており、2001（平成13）年、2002（平成14）年には2年度連続で移入超過額が減少した。それでも移入超過額は1,000億円を超えている。現在とSNA基準が異なるため、単純な比較はできないが、1980（昭和55）年度の移入超過は約600億円であった¹⁸⁾。移入超過額は約20年間

¹⁵⁾ 「元気の出る公社」の取り組み等については、『南日本新聞』（1996年10月1日、1998年3月6日、2003年4月3日）、叶芳和「サトウキビ新時代—奄美大島南部のきび産業再生の可能性—」独立行政法人農畜産業振興機構『今月の視点』2002年11月（http://sugar.lin.go.jp/japan/view/jv_0211a.htm）等を参照のこと。

¹⁶⁾ 黒糖工場の操業は、一般的に1～4月の4ヵ月間。工場では、酒造用黒糖だけでなく、お土産用の「元気の出る黒糖」を製造している。

¹⁷⁾ 詳細は、前掲「奄美の黒糖焼酎産業について(2)」、44頁を参照のこと。

で4割も増加したことになる。1,000億円を超える財貨・サービスの移入超過は、「奄振」をはじめとする財政移転や仕送り等の群島外からの所得移転によって補填されている。

次に、移入超過を対郡民総支出比率で見ると、1990（平成2）年度以降、マイナス30～35%で推移している。90年代前半、いったん移入超過の比率は大きく拡大したが、90年代後半は縮小傾向にあり、2002（平成14）年度には約マイナス30%まで低下した¹⁹⁾。

(2) 黒糖焼酎産業と“外貨”獲得

大幅な移入超過状態が続いている奄美では、“外貨”を獲得する移出産業の育成が求められている。ここで言う“外貨”とは、国際取引で使用される外国通貨（一般的に米ドル）のことではない。奄美群島を1つの国と考え、群島外への移出によって獲得した資金を外国への輸出によって得た外貨に例えているわけである。

これまで、大島紬と製糖が奄美の代表的な移出（“外貨”獲得）産業だったが、近年、衰退傾向にある。1980年代以降、これに代わって群島外への移出を伸ばしているのが、輸送野菜、花きや肉用牛である。また、ここ数年、焼酎ブームに乗って黒糖焼酎産業が県外への移出を急激に拡大させており、大島紬に代わる“外貨”獲得産業として注目されている²⁰⁾。

2004酒造年度の黒糖焼酎出荷額は約95.5億円であり、群島外への出荷比率は約63%²¹⁾と推計される。これにより、黒糖焼酎産業の

“外貨”獲得額は約60億円（95.5億×0.63）と推計される。移入超過額が1,000億円を超える奄美経済において、約60億円の“外貨”を稼ぐ黒糖焼酎産業に期待が集まるのは当然である。

しかし、稼いだ60億円のうちの多くが、黒糖焼酎産業自身の原料や資材の購入に使われている。つまり、“外貨”の多くが、地元に着ることなく群島外に流出している²²⁾。主原料のうち水は地元で調達されているが、原料糖（黒糖）と原料米のほぼ100%が群島外から移入されている。本誌5月号で紹介したように、原料糖のほとんどが沖縄県産と外国産である。原料米については、そのほとんどが海外からの輸入米（タイ米）であり、焼酎メーカーの多くが鹿児島県酒造協同組合（鹿児島市）から購入している。

群島外からの購入は原料だけではない。表2は、焼酎瓶等の資材の仕入先についてアンケート調査を行った結果である²³⁾。焼酎瓶、ラベル、キャップ、箱のいずれについても鹿児島本土もしくは県外の業者（卸業者及びメーカー）から仕入れられている²⁴⁾。また、当然のことながら、製造・貯蔵設備、瓶詰め・ラベル貼り機械等の工場設備も本土から購入している。

5. おわりに

本稿では、奄美経済の構造変化を確認した

¹⁸⁾ 1980（昭和55）年度の移出入超過額は63SNA基準、図6のデータは93SNA基準による。

¹⁹⁾ 鹿児島県全体の同比率（純移（輸）出及び統計上の不突合額/県内総支出）は、マイナス10.9%（2002年度）であった。

²⁰⁾ 奄美における“外貨”獲得産業に注目したものとして、『南海日日新聞』（1998年3月4日）、『西日本新聞』（2003年6月26日）、『南日本新聞』（2004年12月1日）がある。

²¹⁾ 2003酒税年度の県外出荷比率（国税庁統計）は58.1%で、また奄美群島を除く県内出荷比率（筆者アンケート調査による）は約5%と推計される。

²²⁾ これに対して、大島紬産業では、生産額のうち1割が絹糸代として島外に流出するだけで、残りの約9割が紬業者の件数として島内に落ちると言われている（『西日本新聞』2003年6月26日）。黒糖焼酎と大島紬の“外貨”獲得と経済波及効果については、皆村氏によるまったく逆の評価もある（皆村武一『戦後奄美経済社会論－開発と自立のジレンマ』日本経済評論社、2003年、148－150頁）。

²³⁾ アンケート調査の詳細については、前掲「奄美の黒糖焼酎産業について（1）」の17頁、脚注33）を参照のこと。

²⁴⁾ 焼酎瓶の仕入先にある「島内」には、リサイクル（業者）を含む。以前はリサイクル瓶の利用が多かったが、島外出荷の増加、消費者ニーズの変化（瓶のキズ等へのクレームの増加）、オリジナル瓶の開発・使用の増加、瓶の洗浄の手間の節約等の理由により、近年では、ほとんどのメーカーが島外業者から新瓶を仕入れて使用している。

上で、経済波及効果と“外貨”獲得の視点から、黒糖焼酎産業が基幹産業として果たす役割について分析した。本稿は、決して黒糖焼酎の成長やその経済効果を否定したり、過少評価したりするものではない。また、黒糖焼酎産業の成長による経済効果については、本稿では十分な分析が出来たとは言い難く、正確な評価のためには、より詳しい計量的な分析が必要である。この点は今後の課題としたい。

ただ、産業連関の消滅や物資の外部依存（需要の漏れ）の拡大などにより、黒糖焼酎産業の成長は奄美経済の成長に十分に活かされているとは言い難い。今後、黒糖焼酎産業と地域経済の結びつきを強化するような工夫が必要である。いずれにしても、かつて大島紬が果たしたほどの役割を黒糖焼酎産業に期待することは難しい。今後は、複数の産業を育成するとともに、奄美の文化や自然と黒糖焼酎、黒糖、大島紬、サトウキビといった特産品（地場産業）をうまく結びつけることによって、奄美の魅力を外部にアピールし、観光客の誘致等に活かしていくような工夫も必要であろう²⁵⁾。

最後に、アンケート及び聞き取り調査にご協力下さった黒糖焼酎メーカーの皆様、奄美大島酒造組合の喜禎光弘理事長及び牧正二郎事務局長にお礼申し上げます。また、資料をご提供下さった鹿児島県農産課糖業係、鹿児島県大島支庁商工水産課、宇検村役場総務係、本場大島紬協同組合、東磨子さん、中原杏奈さん、同僚の北崎浩嗣教授にお礼申し上げます。

²⁵⁾ 藤田氏は『黒糖焼酎を通して奄美を売る』ことを提言している（藤田聖二「黒糖焼酎の生きる道～ブームで終わらせないために今すべきこと～」鹿児島県地域経済研究所『地域経済情報』No.173, 2004年8月, 12頁）。

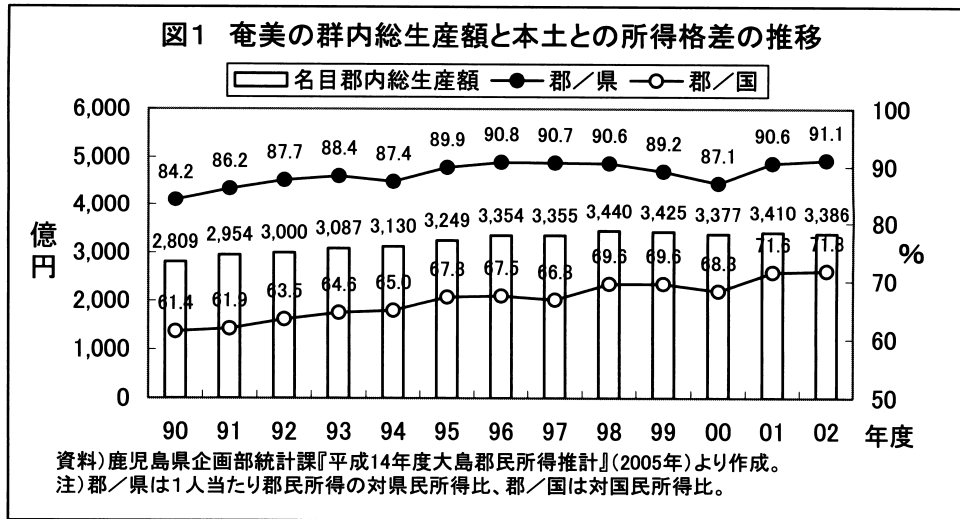


表1 郡内総生産の構成比 (%)

| | 大島郡 | | 県 | 国 |
|-----------------|-------|-------|-------|-------|
| | 75年度 | 02年度 | 02年度 | 02年 |
| 農業 | 10.0 | 4.3 | 3.8 | 1.0 |
| 林業 | 1.1 | 0.1 | 0.2 | 0.0 |
| 水産 | 1.6 | 0.9 | 0.7 | 0.2 |
| (第1次産業計) | 12.7 | 5.3 | 4.7 | 1.3 |
| 鉱業 | 0.4 | 0.3 | 0.2 | 0.1 |
| 製造業 | 16.5 | 4.2 | 11.8 | 19.7 |
| 建設業 | 12.0 | 11.3 | 7.2 | 6.6 |
| (第2次産業計) | 28.9 | 15.8 | 19.2 | 26.4 |
| 電気・ガス・水道 | 1.9 | 2.9 | 3.6 | 2.7 |
| 卸売・小売 | 10.3 | 7.3 | 11.2 | 13.2 |
| 金融・保険 | 3.0 | 5.0 | 5.7 | 6.5 |
| 不動産 | 5.8 | 10.4 | 11.3 | 13.2 |
| 運輸・通信 | 6.6 | 7.4 | 7.5 | 6.1 |
| サービス | 9.2 | 20.4 | 21.1 | 19.9 |
| 政府サービス生産者 | 20.7 | 22.6 | 13.2 | 8.9 |
| 対家計民間非営利サービス生産者 | 1.0 | 2.8 | 2.6 | 1.9 |
| (第3次産業計) | 58.4 | 78.8 | 76.1 | 72.3 |
| 計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

資料) 図1に同じ。

注1) 構成比は、帰属子等控除前の郡内(県内、国内)総生産を100%として算出。

注2) 郡内総生産の75年度データは68SNA、02年度データは93SNAによる推計。

表2 奄美の主要産物の生産額 (単位: 億円)

| 1980年度 | | 2003年度 | |
|--------|-----|--------|----|
| 大島紬 | 286 | サトウキビ | 84 |
| 砂糖 | 186 | 野菜 | 76 |
| サトウキビ | 131 | 黒糖焼酎 | 76 |
| 野菜 | 52 | 花き | 55 |
| 花き | 21 | 肉用牛 | 47 |
| 肉用牛 | 21 | 砂糖 | 40 |
| 黒糖焼酎 | 17 | 大島紬 | 26 |

資料) 鹿児島県大島支庁『奄美群島の概況』(各年度版)、鹿児島県『大島群民所得推計』(各年度版)、奄美大島酒造組合資料。

注1) 大島紬は歴年、砂糖は2002年度、黒糖焼酎は酒税年度。

注2) 砂糖については、総生産額から中間投入額を差し引いたもの。

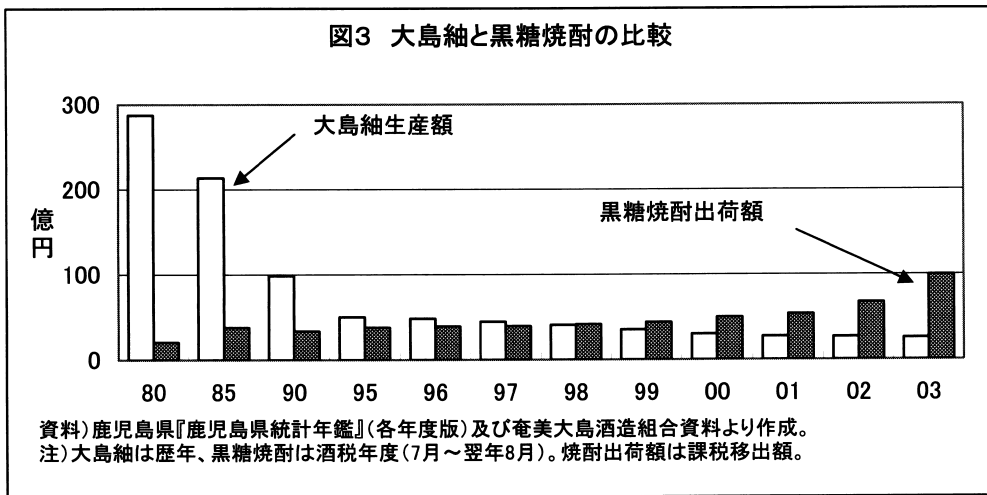
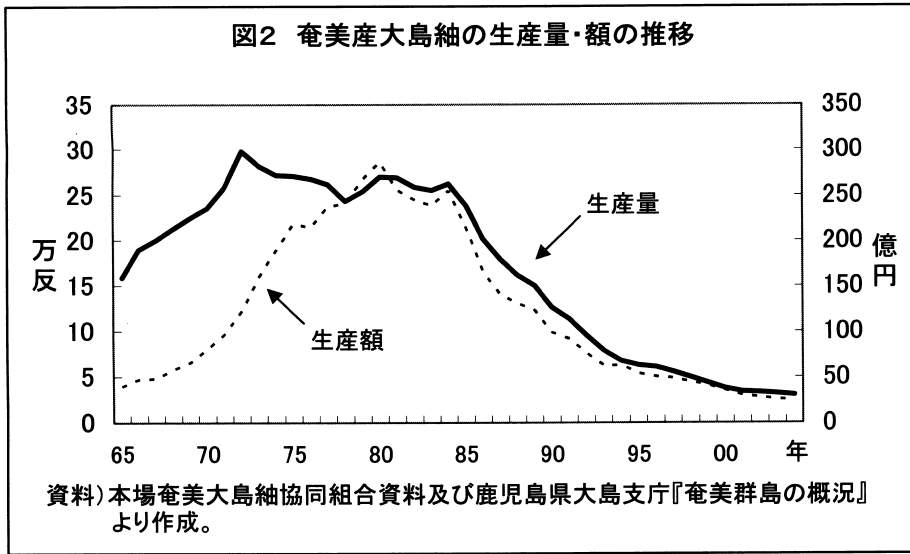
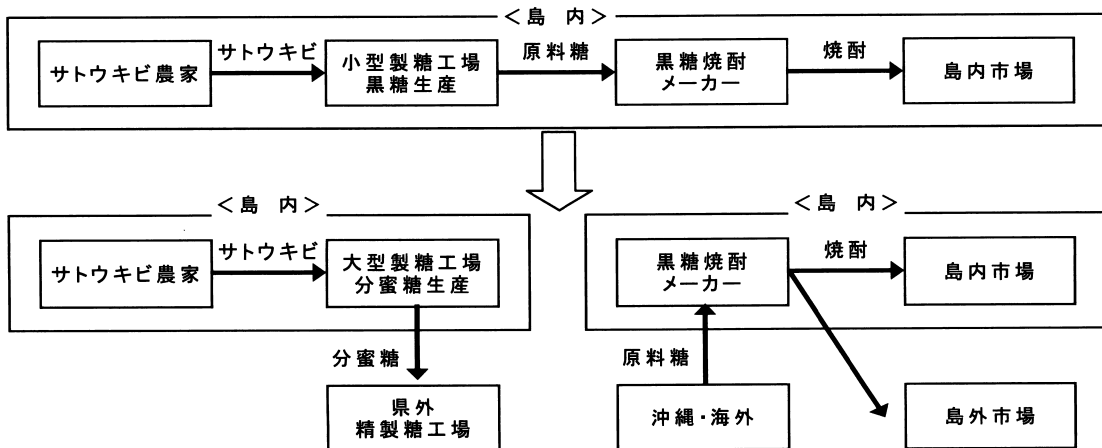
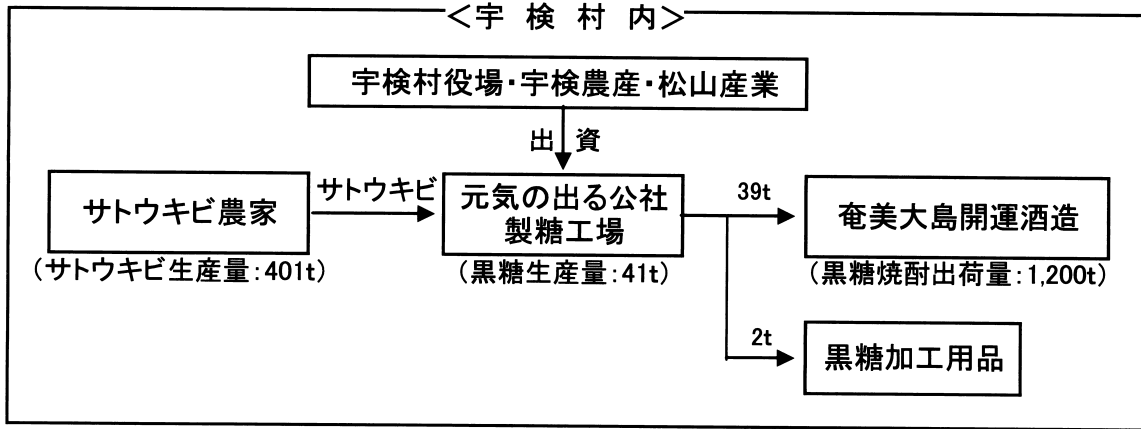


図4 サトウキビ・砂糖・黒糖焼酎の産業連関の変化



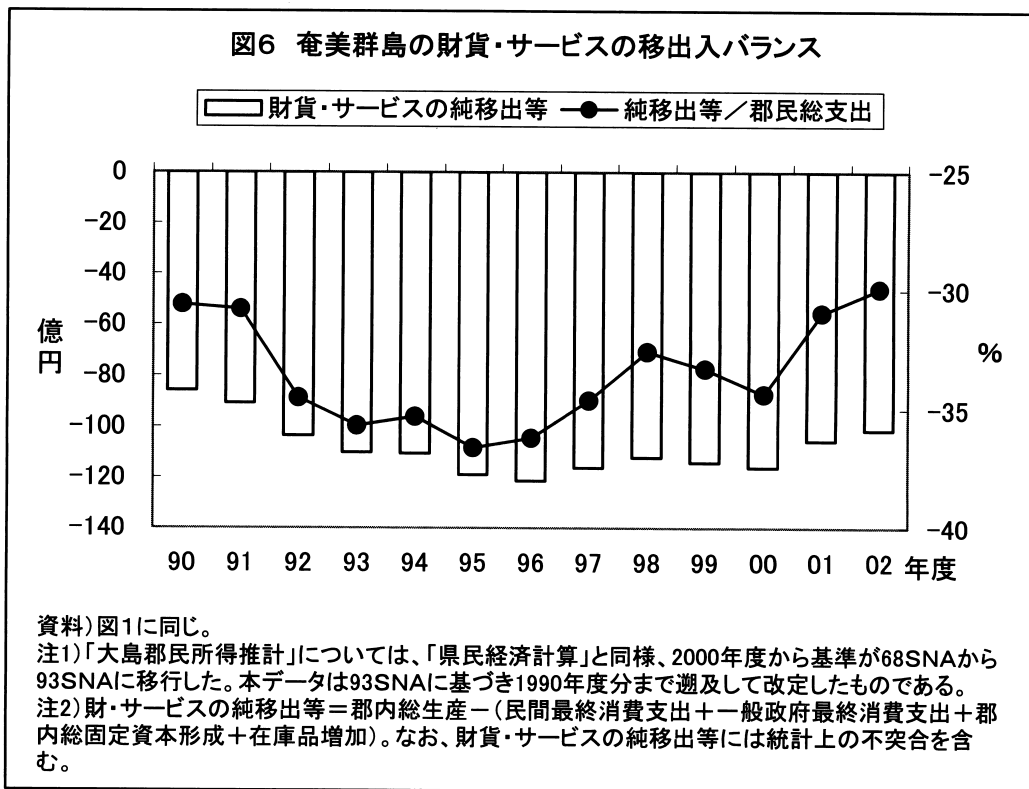
資料)筆者作成。

図5 宇検村におけるサトウキビ・黒糖・黒糖焼酎の産業連関



資料)宇検村元気の出る公社資料等より作成。
注)t数は2003(平成15)年度の生産量及び出荷量。

図6 奄美群島の財貨・サービスの移出入バランス



資料)図1に同じ。
注1)「大島郡民所得推計」については、「県民経済計算」と同様、2000年度から基準が68SNAから93SNAに移行した。本データは93SNAに基づき1990年度分まで遡及して改定したものである。
注2)財・サービスの純移出等=郡内総生産-(民間最終消費支出+一般政府最終消費支出+郡内総固定資本形成+在庫品増加)。なお、財貨・サービスの純移出等には統計上の不具合を含む。

表3 黒糖焼酎関連資材の調達に関するアンケート調査結果(複数回答)

| | 回答数 | 島内 | | 県外 | |
|--------|-----|----|----|----|-------------------------|
| | | 鹿 | 児 | 島 | 本 |
| 焼酎瓶 | 15 | 3 | 14 | 5 | 大阪②・兵庫②・京都①・福岡①・熊本① |
| ラベル | 15 | 2 | 6 | 13 | 熊本①①・大阪④・福岡③・徳島① |
| 瓶のキャップ | 15 | 0 | 12 | 4 | 大阪②・神奈川①・長崎①・熊本① |
| 箱 | 15 | 3 | 7 | 8 | 熊本⑤・福岡②・佐賀②・大阪①・兵庫①・沖縄① |

注)「県外」の都道府県名は仕入先の所在地、○内の数字は回答企業数。